

風が吹いている

駅を出た瞬間、強い風を受けた。
体温と気温の関係が、ちょうど頃合で、ふと、あの時の温かさを思い出す。

風に押されて、人の波に飲まれるように元町駅を出た私は、そのまま度良いタイミングで信号が青に変わった歩道を渡り、漏斗状に少し細くなった歩道に流れ込んだ。

朝の光はまだ建物に遮られている。

南の空を見上げる。快晴、雲はない。今日の空は特に青い。

視線を前に戻して、緑色のDAIMARUという文字を眼鏡越しに確認する。

そのまま無数の人の背中についていくが、私の足では人と同じ速度で歩けないので、ゆっくりと人の後ろ姿を観察しながら歩いていく。歩道の端で、人の邪魔にならぬよう。

スーツ姿の人や、畏った姿の人が多い。お揃いのような新品のスーツを纏った若者達が数人揃って談笑しながら歩いている。期待、高揚、大きな不安。それを隠すために胸を張って歩いている背中、まだ学生気分抜けない幼い背中。

彼ら彼女らの姿を愛おしく見つめて、ゆっくり歩いた。

シャツターを半分上げて開店準備をしている店がある。清掃業者や、運送業者、工事の人がちらほらと道の脇で作業をしている様子も見える。大丸はまだシャツターが降りている。
る。

次々に抜かされて大行列の最後尾になっていた私は、速度を変えることなく信号が青に変わった瞬間のスクランブル交差点に踏み出すことができた。左足で踏み締める。

風が人々を押し出す。

皆がここを起点に、南へ、東へ、西へ、進んでいく。

私は昔から、用事がなくとも休みの日に掛ければ、何となくこのスクランブル交差点を通りながらどこに行くかを決めていた。そして結局大丸に入る。何も買わなくても一度大丸の中を通り抜けて、それからふらりといういろな店へ出掛けた。

このスクランブル交差点は、十時を過ぎれば一日中、人が賑やかに行き交う場所。

大丸に吸い込まれていく人達。

買い物袋を下げて出てくる人達。

大丸に背を向けて、商店街に入っていく人達。

この光景は震災直後を除いて、ここでずっと続いている。

私は母と良く来た大丸が好きだった。何でもここで揃って便利ね、と二人で買い物を楽しみ、時々洋服や鞆を買ってもらった。それほど派手な買い物はしなかったが、たまの贅

沢が嬉しい場所だった。母は私が喜ぶのを見て喜んでいたように思う。

私が勤め出してからは私が時々母を連れ出して着物や洋服を買ってやるようになった。親戚や近い人に慶弔があれば一緒に贈答品を揃えに来た。

それからずっと、母がいなくなつてからも、自分が離婚してまだ小さな娘と二人きりになつてからも、ここに来れば少しだけ、元氣になつた。仕事はずっと続けていたから、さやかな贅沢をたまに楽しむことが出来た。休みの日に娘を連れて、このスクランブル交差点を歩いた。煌びやかな店内を、手を繋いでゆっくり歩くと、娘は瞳を大きく開いてあれこれ目を留めた。ある時「お母ちゃん。これ、このお洋服かわいいね」と指を差すのがたまらなく可愛く思え、「大きくなつたら、お母ちゃんとお揃いを着ようか」と笑いかけると、目をきゅつと細めて微笑み、私を見上げピタリとくつついてきたのだった。

そうか。母は、こんな気持ちだったのかもしれない。

娘はあの朝、一部崩落した天井と壁の下敷きになり、桜が満開になつた日の朝に、その怪我を元に息を引き取つた。心臓が止まつて臨終を告げられた瞬間、あの時の洋服を、何とか着せてやりたいと思つた。混乱して泣きながら「ニットを着させてやりたい」と訴える私に、看護師は辛抱強く慰めの言葉を掛けてくれた。娘の頬を撫で、大きな声を上げて泣きわめいていた私は、泣き声を上げることに関心なく溶かされていくように感じていた。泣くことが、必要だった。もう目を開けることのない小さな身体をぎゅうと腕に抱いて、ピタリと頬を寄せて、泣きながら笑いかけた。

温かく柔らかいその体温をずっと感じていたかつた。

あの日一緒に見た桜色のニットは、心の中で着せてやることにした。私もお揃いのニットを上から被つて着て見せた。可愛いよ、似合っているよ、と言うと娘は微笑んで、おかあちゃんもかわいい、と目を細めた。

親しい友人一家も恩師も、多くの知人が家屋の下敷きになつていたことは、その後知つた。私は何ヶ月も、周りが見えないままだつた。必死に娘の面倒を見、家の後始末をし、仕事をした。自分もくずれた壁に挟まれて足の一部に壊死を起こし、右足を不自由にしたが、いちばん大切な存在は骨になつた。夜はどうしても孤独に耐えられず、日によつては何時間も泣いた。その後も心身に残る痛みの記憶を消すために働き続けた。ずっと泣いていたわけではない。もちろん時間が痛みを多少薄めてくれた。元夫は他県に移つており無事だったが、娘の事を手紙で知らせた際には、自らの辛い心中と、私への気遣いを長い文章で送つてくれ、その後は長く手紙を通じてお互いを思いやることになつた。離れているから、優しくいられることもあるのだろうと思う。

そうして気が付けば五年が経っていた。
桜が咲いていた。

空は青く、雲はない。

風で吹き飛んでしまったのだろうか。

今朝起きた時に窓の外に桜を見、あの時からずっと通れなかった道を通ろうと思った。どうしてそう思ったのか。あの桜色のニットを思い出したのかもしれない。いつか似たものを買って墓前に供えねばと思ったり、あの時心の中で着せたことが一番の供養ではないかと思ったり、どうしても決着がつかないまま、それでも何となくそうしてあれこれ考えていることが、娘との対話になつていふようにも思え、少しだけ楽しかったのは確かだ。もう一度見に行ってみようか。サマーニットだったから、今からでも沢山着られるだろう。見つからなくてもいい。探してみたい。

まだ五年。まだあの煌びやかな時間を通ることは出来ない。

賑やかになる前の時間から始めよう。

二〇〇〇年四月三日、午前八時半、快晴。

大丸神戸店の元町玄関口前にあるスクランブル交差点。たくさんの方が行き交っている。

強い風が、吹いている。